

## 《教育長メッセージ 第64号》



### 『おらが学校』

私は、教員として海老名市立杉久保小学校で教員生活をスタートしましたが、有馬小学校、上星小学校に勤務した後、市役所に異動しました。ここでは、教育委員会で教育行政にかかわってはいましたが、学校現場からは離れていました。そして、この職に就く前に、12年ぶりに学校現場に戻り、2年と7カ月、有馬中学校にいました。

有馬中学校にいる時には、すでに四捨五入して60歳でしたから、これまでの教員生活をふり返り、目の前の子どもたちや教職員の様子を見て、さまざまなことを思いました。考えました。

その中のひとつが、「もっと地域の人や、保護者が、学校に来てくれないかなあ。」ということでした。

有馬中学校は、海老名の中でも学校と地域のつながりがあり、体育祭やバザーには、保護者はもちろん、地域の方々にも来ていただいて、賑わっていました。

しかしながら、私としては、日常的に、学校に足を運んでもらいたいと思っていました。

当時の学校評議員さんと話し合っ、て、さまざまなアイデアをいただいたところで、学校を離れることになりました。

その思いは、今の職に就いても継続しています。

そして、その思いの原点は、自分が生まれ育った田舎の学校がそうであったことでもあります。セピア色の1枚の写真からでした。

それは、関東大震災後で被災した学校を地域の人やが再建した時の、建て前（棟上げ）を写した写真でした。

地域の人やが、地域のシンボルである学校を子どもたちのために、自分たちのために、資材を持ち寄って、自分たちの力で再建した時の写真です。

梁の上に、数十人の大人が写っていました。どの顔も誇らしげに見えました。自分たちの母校を自分たちの力で再建するという気持ちまでもが写っているように見えました。

「おらが学校」として、学校が地域から愛されているように感じました。

私が、めざしている学校は、「おらが学校」として、地域の人から愛さ

れる学校です。そのためにはまず、多くの人に学校に足を運んでもらう、学校に来ていただくようにならなければなりません。

また、そのために、学校が地域に出ていくようにならなければなりません。

市内の小学校に「学校応援団」を設置して3年目となります。徐々に、その効果が表れて、数年前と比べると、多くの方に学校に来ていただいています。子どもを、学校を支援していただいています。

「おらが学校」への取組は、一步一步、進んでいます。

今後は、子どもが、学校が地域を愛する活動によって、さらに深化するものと考えています。

子どもは、できるだけ多くの大人たちにかかわって成長した方が「しあわせ」になれるというのが私の持論です。

そして、子どもの成長にかかわることが、地域の方々の生きがいにつながるようにと願っています。

今回は、「みんなの学校」と題して、これからの学校づくりについて、私の考えを述べてみたいと思います。